

KODAK
LICENSED PRODUCT

M

U

W

KODAK Gray Scale



切茶指掌編

月之部

下



門 7 9
藏 628
巻 3



書系指掌編卷第三目錄

未考古之種葉の置所を問ふ事

説

或人利休は古昔の教をあれを問ふ

説

利休蝦蟇の硯を問ふ事

説

或人の説

或人の説を評

附言 見識を問ふ事

所の説

義内傳來の鉦の事

説

河井の事、本話の事

土記を喜ぶ事との事

説



利休中央亭を建てて忘るる事

説

利休道安の概略を述べたる事

或人の説

或人の説を述べる

室町殿の説

或人の附言

説

高岸寺に於ける事

紹智古田織部一茶の事

説

之を依て久曾の文の事

利休の風情を説く事

説

北野大茶の湯の事

豊臣殿下利休の後述する自由の事

説

利休風情のまゝに思ひ付る事

或人の説

説

或人の説

説

山上道七清助の事

説

医師清助の事

きふ風情の決一風を説く事

説

宗旦風情の約言を止る事

説

宗松大源庵の事

説

宗松飛鳥の事

説

角軒風情の決約の事

説

扇新風呂の便の端

説

宗横風呂の便の端

説

或人の回へる事

貞置控十郎は風呂の便を回へる

説

ぬるぬる又そそ風呂の便の事

或公息某法所生の事

説

紹有扇新の便を見て思ふ事

説

又そそ風呂の名残の事

説

福壽院扇新を某は招ふ事

説

長園休夢の事

説

利休或人の炉中を見て思ふ事

説

附言 便所給益の事

利休風呂の切取の事

説

貞並炉縁の端の事

説

大勢の事

即ち扇を招ふの方へ付初る事

炉の切取名目の事

説

大勢の事

説

又阿弥宗久は異見の事

説

殿下宗吸利休の春天月夜覽の事

説

片桐の息上覧の事

誤

宗春利休織物の息上覧を諱の事

誤

柳生殿宗旦の息上覧を賞美とすの事

誤

殿下大佛殿の息上覧を諱の事

誤

利休とある息上覧を称美とすの事

誤

少菴の息上覧の事

誤

本垣坊利休一軒の事

或人の誤

誤

道安利休の息上覧を諱の事

誤

附言 数寄者系譜附録の事

道安利休の息上覧の事

誤

利休初て息上覧の事

誤

扇新葉の四掛屋の事

誤

或小室家の庭踏石の事

利休初て息上覧の事

誤

利休とある息上覧を称美とすの事

誤

炭の諱

利休或人の息上覧を諱の事

或人の誤

附言の誤

道也を息上覧とすの事

誤

織部道あるべき所

その安の事

後 記

樂系指掌編卷之三

平安連水宗達翁著

男 宗暉校訂

豊後守下種繁の遺書に何処そや同様の利休と云ふ事
を記す

こゝに於て指掌編の一―畢竟其書の所記は善文
に富みたるものなりと云ふ事―を又よき序を著
す

或人利休は同治時時代の数ある事と云ふ事

天正十八年豊臣殿下小田原清陣中にいふ事と
て利休一風呂を執事より作の時利休より清陣
系にて大島良風呂の清執事といふ所名より風折より付
やと何より縁子とせしもの作より付て臥て良風呂を
製よりよりはて支より清執事より

何れ一通の清執事より清陣中の支され殿下
といふや清平常の頼より遠へいふことや井ふ
たかや執事せしもの作よりと聊清執事を
此よりや井ふ所の清執事より此良風呂の又佳
ちよりと清執事より清執事より清執事より清執事より

より清執事より清執事より清執事より清執事より
田原風呂との唱はえ又板風折或は良風折と
いふ事あり

同十の京や西の大島の清執事の時或は良風折
清執事より清執事より清執事より清執事より
清執事より清執事より清執事より清執事より
天正十八年より清執事より清執事より清執事より
清執事より清執事より清執事より清執事より
清執事より清執事より清執事より清執事より

にめりきりしとて國はさき人へはけしきとて
る指をいふを源と習ふはつゝの理なりあまは
ゆりきりしとてしるしとて終極なりとて
根元居いふ事なりとてふかきとて信也

利休死後いふるおや公の作はかきの時と利休が居ぬ
あゝふ月ゆきとて時と指の時利休がぬぬる自由とて
けしきとていふ事なりとてしるしとて終極なりとて
けしきとていふ事なりとてしるしとて終極なりとて

典義なる小田原清陣拂の時古田織部と利休由井廣を
るよりしてはけしきとていふ事なりとてしるしとて終極なりとて

漢の京をいふ事なりとてしるしとて終極なりとて
利休をいふ事なりとてしるしとて終極なりとて
うの哲度とていふ事なりとてしるしとて終極なりとて
万事なる事なりとてしるしとて終極なりとて

或人云此波も縁の紋様をいふ風なりとてしるしとて終極なりとて
あゝとていふ事なりとてしるしとて終極なりとて
ふ或人の説はさきとてしるしとて終極なりとて
の秋とていふ事なりとてしるしとて終極なりとて
といふ事なりとてしるしとて終極なりとて
此の利休は生涯風流の事なりとてしるしとて終極なりとて

[illegible]

冥理なる。縁といふも、たゞ縁を利権するに過ぎず。
 形ぬれは、
 とい下地を押切て、縁といふも、人只何れく度をも
 言ふべき。縁ありきより、是より先利休有る入湯の時彼
 地の阿弥陀佛と云々。精進に至りて僧侶と兼信の園又
 山を見て風鳥の所を山とせんとて、書を数冊読むと云
 文の人曰く、籍を唱へても取て、かゝ何れか
 も著るなりと云わんべし。此二条を合して、及風鳥の
 所の故撰よく調へて、
 廣新の下原たるや

い痛哉我は、あゝ風竹の庵の秋も自然と編
みなりあゝとさるるきまなり

近頃法がよき人医術よくつくもさるる藤田の事
いゝと云ふはうきむ高談する本はさきく生活に
むるを志す時、予の庭の松樹勢を衰たしけは
ありとて、随分あり何てもなれどもや、未だ
云ふを教くはさきく人の心を教へ何ても
と解く、の秋も必智人のよき何てもなり
跡より、能き人のよき、さるる人をも
いゝ昔も折しも、さるる人をも、さるる人をも

はるかたは、秋の夜、あゝ受方てさるる人をも
て、さるる人を教へ、さるる人をも、さるる人をも
さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも
おもしろく、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも

まき、作らるゝ一風の庵の秋、さるる人をも、さるる人をも
け、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも
さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも

此所の、さるる人の庵、さるる人をも、さるる人をも
け、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも

京且時代、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも、さるる人をも

十

舟にまゐりて

二人の親と旅する。あつた。二の親と。いふ。あつた。

時勢倭風の所をいふ字は新書を能く通へし

いねがよき幣と佐よ中々知人の人の願は入ねむらり

[illegible]

うかやうと云ふと庸子へいゝとに前より彼宗法態をいふに
水受の指をみずを能くひいて大支拂ていゝと云
詔有と真諦了智の三男にして最期の宗たうや
庸子もまゝと云ふ宗法は宗法といふやゆゑにまゝ
何いゝと云ふと云ふてまゝといゝと云ふ

時感一人の方へ云々云々主云章とる土風歌の灰を
 けく流し丸釜風歌を出せう主は所をわけて
 一臨へ品川何来と云老人来て二座をわけて六人の
 及如くふれ宗匠系上の灰やめし向主をみて今かく
 あうーと言ひもいたす一素人の名をよぶ者と飯

人後より来て流るぬ悔未所ねとある。如いふ言
ともふ人よりいふ遠き人へふ言を言ふに人
是れの手に見るまや曾か言子紹有にいふ言

又言南八月の末より今日菴にて風がのち残しててて金
より事なりお供の豊田を傳井上宗恵より此時に就の
一灰を工失きと教ふありや

又言廿五十二歳の時の事には生涯のち残して有
る予が以下向錢ふくくの家やと教示の語を
尾形談は若ぬ何風言てもとて語を執言は時
いつと向一文をよる事や向へる

愛宕山福壽院首坐の細川之助の末子にふく家も言ふ成
時扇形を言ふ一呼一釣金に於て中隔をよけして中か
四く大形一文をよる一呼一釣中隔をよけして中か
うたて云利休もおのゝか招くともあるや毎度又此が
中をよる一呼一釣形にともいふ出て形をよる一と云
ふ一と扇形もけりや

大寺退菴の隨筆に出るは形中の語といふ言
者よりあるといふ後の人の言よりて古昔の語を形
より語ちれいともいふ中太甚かと拭ておる
ふれてい形よりい語戒禁を破るも難言と云ふ

[illegible]

此圖は夢の案に唐新語より一は中土の直よりたうれ
 形を事にも有ると思ふ一は利体をくかくせし文あり
 面よりうつるや之無き毎度うくとわく故に又夢と云
 とおもふ

十五夜の月をめぐに所入ていろいろお偶の太きくはゆ

沙丘

はやと聖う詔益へりて時うての詔なれはうの
方にもいさう詔有て詔い無を憐れんとせられ
ふふふ詔うへふふふ詔のありやと何う詔益なれ
いふの事にもあふけ何人々吉野を移るゑもいむ
也何の誓のそ人際のもうきまき一あつたけ
風野の成をわたりたふといとあふはてあふうて
風呂は成をなうあふもあふはてあふあふの
人々東の事なれい且哉一思ふふふ人
利休風野の歌を切て柱の幸り張舟をくけなうて
追くくあふあふとさう

けう何事にも深く考ふ計されい誤る追
追はあふうといあふう大恩い彼は妻宗恩直
一たうとさうう一太女なれいあふういあふな
せ一集一

貞置云に切の即古昔い詔縁まも本地とち一まのま
縁うて有るを近代詔達うとやと云例は見休有云
て是い必は受遠うてやと云田舎も系もたてて本地ま
と一詔語の四葉の歌も本地縁とてまのまはちうや
いふうなれい必るを遠うてや有人と云貞置いやたはは
口切の時分ういあふいけは遠水の面柳まふと本地や

又窓竹れくもき布くお替るや蛇の竹縁も本城を
 る若ちうと強くしりくねり葉て堅くにお達せし
 いにち終くくぬるや蛇の竹縁も本城の由縁に
 書く古田織物く十月月切くきりく道きけり
 冬妻竹縁本城せい高の葉入葉きりく有るや縁方
 葉よりく自分の留き方を蛇ねりて玉葉の葉に
 大谷考十所よりきりく蛇ねりてきりくを我
 も留くきりくや古代の葉切く本城縁くきりくを
 きりく及縁の小賢ききりく蛇ねりてきりく本城
 く善く風くきりくを煙人何れきりくきりくを

く蛇の葉きりくきりく蛇ねりてきりく本城
 何れ本城の葉のきりく蛇ねりてきりく本城
 あくきりく蛇ねりてきりく本城
 きりくきりく各自の葉きりく蛇ねりてきりく本城
 蛇ねりてきりく人々教示せしきりく

蛇ねりてきりく利休をきりく古
 きりく蛇ねりてきりく蛇ねりてきりく
 本城にきりくきりく蛇ねりてきりく
 何れ人々きりく蛇ねりてきりく
 縁をきりくきりく蛇ねりてきりく

各々の流俗に押されてかくまゐることをほ
たふちと人にいふを自ら恥のめふ事
候ふところにていふ小賢き人の言をきくは物
又まゝとていふをいふに似ていふもの
是とも織物に糸は母を折る時の言をきく
のにていふに似ていふ織物に糸は母を折る
其志有るに似ていふ言をきくは物
概して難速貞節の言をきくは物
この言をきくは物に似ていふ言をきくは物
此言としていふ言をきくは物に似ていふ言をきくは物

只財宝を斗より多くに口切る本城縁を
穩ちる有貴財の風ふく人々をきくは物
件籍宗たる言をきくは物に似ていふ言をきくは物
爰とていふ言をきくは物に似ていふ言をきくは物
ききし言をきくは物に似ていふ言をきくは物
因ふ言をきくは物に似ていふ言をきくは物
是をきくは物に似ていふ言をきくは物
の流俗に似ていふ言をきくは物
流俗をいふ言をきくは物に似ていふ言をきくは物
ゆかりに似ていふ言をきくは物

江戸参宗在 南紀よりたふ前の時帛を繕ふ計
は付始しと土紀二三つて語きしも其意にておれ
れどもとておつて各自を子家源とせん
戸後いゝとて今いふ中も難有財ありて名達
ふ道とて古きとて通るもきいめくたこそ
予い彼等とて利を更ちれいそ語はし不煩といふ
哲々語しつて思ふなり 天明八年正月七日に
聖護院法親王宗を法取をふ付始て法猷宗の
あまたうをくつ語をいふて帛を入る相点
宗より及て二つ重なりといふて更調ぬ一は

い赤面も及ぬらん。此時よりたふ二つ重なり
近松何れも古昔作を切始し決い上ヶ切下ヶ切押付切注
三つたふとてなり

を松い尾分の人より宗更禪の作者ありて本又此
そのいゝとて及語語ありきとて四重中切本因
切向切隅作とてききい怪事とて一古きとて本よ
道々更の糸い出いし作をい出い作とて又出作
とてよりい念書目切或い本目意たといふ古更有
更なり作といはの語より大の字をきいし書
大目書なりといはの語より

豊后殿下の清前にて津田宗吸千利休とあるのをみて目
息法は後人の時宗吸保く意の端へあを落しつゝ利休
の更す故より依利休を法師範とて本此意を清物
にそふぬちり津田ちれに跡付て概とちり

利休は器を器を落しなれど又名物とて
もろもろ計られ万般勢をええ一人の耳障りお
しやうれ一壁てえん名人の鋳術者有て終ふ
覚を獲りて天下の細術を以て無言終つて世を
渡りし時宗人の所をにき清前にて仕合せ
は名人は時宗に當て一生涯はたきふ言を執又下

は名人一しり一度の器を有ちりおつて其人の
撰りてて器を以てこれ敷にありてわき
もけりし時宗平時一棄けの利休の勢をある
宗吸とてしりて利休は名人にありし時宗をえ
てしりし時宗の時宗ありし時宗といふも此意は
えりし時宗人分りし時宗人いふもやんやし
宗吸のつ人に六十利休のつ人に三十にありし
利休とわきしよりつ人もありし利休といふ
古きよりしりて又いつる義をも異くしりし時
宗の利休といふも長閑意の記にもありし

と云松本見体侍りてありやたゞしき有方表は自分も若
 年にくまそこのち裁落さるれりて既に先づ計を
 おぼしめしきもれは久る織物に比しき及利休
 といふ趣き人といふ趣きをききとてやされしきお
 ちおれ目り裁落さるるにやと笑

こゝに終りき支あれも他人のちまたに比し
 ぬ説のこゝをいさゝかといふ趣きはれ殊にありて
 叶ふ叶ふとありて又人より首を余に九意のふ及
 如ちう先づ利休宗叔素天目息素の因に若ぬ
 柳生偲るち宗叔と息素をてめへてけりし趣きの前記の中

中な程にいたるぬれ一向に遠るるとりけりし趣きされ
 目る趣きを惜しむ人々を南紀とかきへ仲睦せしむ
 いあきり

鳴乎道に不堪居とけりし叶の美ありてしき
 然るに宝石数段ふききかひのちあつとて
 せしめ人時より有人よりきき人れは稱美を
 更にもりてしき宗叔のち平明なり

豊臣殿下作しき若大佛教にて素のゆいけりし趣きの
 いしき方より又後々入きやと清守の時利休は
 けりし趣きの法はけりし趣きのあれといふはしきや

吾此友人より後方ちたもゆくまゝなり
く損僅は十幾ハ世の夢もさる葉の如くふたね
く思運徒の澄くもくわと悟りけり四時
以下の小水変り一偈樓さる人なりまゝ後より
や、また佛角を指し、ありと葉式必さる
一俣とのみ、ゆるやん然るて古実を、慕利休
敬下はまゝ、趣き、連人より方年より既に

靈元帝の勅より古昔より和歌の人と云く麻呂貫
之定家通達院に余朕より子の実法ちり
やうんとの 敷き、えを指て、言を、心計

ふ 元永の以板倉何来々て葉の類なり
知名運のくまふ山堂、聲更利休、さあ、機可
足鳴年、葉本の眼より、く、て既正法眼藏の眼
を、観て、眼、道安と唱へ、心、を、心、を、心、を、
眠、を、心、を、心、を、心、を、心、を、心、を、
りて、く、を、心、を、心、を、心、を、心、を、
蕉の心、を、心、を、心、を、心、を、心、を、
ちり、く、を、心、を、心、を、心、を、心、を、

利休、常、に、心、を、心、を、心、を、心、を、心、を、
く、りて、く、を、心、を、心、を、心、を、心、を、

て常平に達せしとなふにいくれより利休云はるる必
常平に達せしとなふにいくれより利休云はるる必

此章の三條人情を通つての考えておけし
一起予者高也のこゝろを

か菴茶の湯き一壺日ふ斗道おもなうし此のけを
こも終り入る道おもこハ次見よや

はあ人の見識の遠くを

泉の境の二雪半の本位坊利休一毎に茶を度り
利休茶をさるる本位坊の茶を度りしをわてい何
能ふよりをさるる利休茶をさるる茶を度りしを

を来人のみちをてしやちの思ふに思ふに
しは信ちの信ちの思ふに思ふに思ふに思ふに
あふ茶をさるる

或人云道より長せしを思ふに思ふに

此章の三條人情を通つての考えておけし
一起予者高也のこゝろを
か菴茶の湯き一壺日ふ斗道おもなうし此のけを
こも終り入る道おもこハ次見よや
はあ人の見識の遠くを
泉の境の二雪半の本位坊利休一毎に茶を度り
利休茶をさるる本位坊の茶を度りしをわてい何
能ふよりをさるる利休茶をさるる茶を度りしを
を来人のみちをてしやちの思ふに思ふに
しは信ちの信ちの思ふに思ふに思ふに思ふに
あふ茶をさるる

云々たる人々とは名達の方衆ちんね能研超あり

道安利休へ向て之れを果すを學ぶ教給ふと云付り利
休云や菴よりまづねて

或はよかく若きより更なるにや道ある利便の端
子方にもこそ始に思ふをさむと見ゆるやかたき後
妻の連なりたるもゆかりにえよつかる趣にありき
て愉しむるを年より學の意深き氣性より下
ゆは妙なる所なりんゆくりも有師に撰され
ふ集にもこそ物と善教を交ふに自致連たる
人より有て師に接する者ありその教實にゆかりに

是を其の爲に之を以て文外之意と見る人よく
 之を考利休宗恩が意圖を其の爲に教書者
 系體附録より著るべくに思ふ時を以て之を

此數奇者系禮附錄の十の條を唱名違ひの人能
操をもあゝくそゝたるやを梓よりつもの
んとありとて

道義利体を相時に、善地の爲に人を害して、批判も有らむ
と伺ふ。或は利体臨地して、相伴の人は、咄て此石の内
に一、分程高き石あり。是を善地と云ふ。やと云
ふ。善を善と告ぐに、善も、りたに、おほい、と云ふ。善

てあきくとして中絶ありて直にせくたあぬ体として有
を利休が死の時ありて之をうけはるゝ事ありたる中
んとして居りてとる

酒より前の石と云ふ言より志の厚きを
といひ古昔の時より遠なりと教り又習ひて友に
やと情士宗匠といふも素人のそつとるを
く大慈目あるをいふく習ひてふれしき
物事は志篤人々人々く遠くありと云
利休未と聞きたりし時知く衆の心を傳へる言を
と云ふ所ありしに向道陳をくくし折て及ん

医師を招てて其時の衆の病の重見を乞ふ道陳云此
皆いふ衆の衆入りて衆を多く刷てたぶくと云ふ
後々衆いふ衆にけく大衆入りて衆をく入て
くくせいふくくくくくくくくくくくくくくくく
と聞きたり衆いふく及んて衆をくくくくくくく
告ぐれい大くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくく

は其宗匠と云ふ言より彼衆の随筆より
其をくくくくくくくくくくくくくくくくく
末終りくくくくくくくくくくくくくくくく

磨古澤園監本後孫々一人つゝ家系を承けて京
境一帯一帯先を始諸向の果の産をゆきし
ぬ人より夢一夢と一と追進きしとかる趣あり
橋石も流ししとてさうなりしと人々果を産
いつれのそにてし物なりしとてなりしとて
ありてそのなり

藤村庸彰はもと原をぬたりし時表し小水邊の地にて
獲きし大石を産ししとてなりしとてなりしとて
京より父子を産ししとてなりしとてなりしとて
りしとてなりしとてなりしとてなりしとて

云々を庸彰等の七三浦をさす前より小水邊の地にて
京より産ししとてなりしとてなりしとてなりしとて
及改定なり

庸軒、物ふみ氏の趣よりけられしとて一統を
かゝりしとてなりしとてなりしとてなりしとて
敷ありし大石ふみ氏にゆれしとてなりしとて
して産をふみしとてなりしとてなりしとて
しとてなりしとてなりしとてなりしとて
受て一統なりしとてなりしとてなりしとて
或人小水邊の地より石を産ししとてなりしとて

宗旦い丈石をふれりしに法流後しに稱し起
石の古指骨とせしと云ふ云丈の宗旦扁形の葉は
形一時の説を留て法流とせし根一葉一む今
又隱の産石も小石はとせし丈をふれりし
うけり小石破石たゞと云て並に諸とせし
院のさうに終叶集しきとせし人小もさう
の依りし主も亦も其りてとせし踏足もす
たうわいの石れとせし法義ちとせしとい
よろめく是るに法義たういの只と踏めく
はるを二葉と云ふ丈は宗旦の法流人すそ
の子孫の

と皆法體をもつるやめや毎又言無とてう半變て
いほさうそ入

利休云お変化なりたう仕おせといふ

きうきういほやうお彼ハの月を物敷あ

付たういほさうぬを妻い

利休通あゝあう初世の炭うお客とてにがや

おきき炭の炭根をもんと思ひ鳴平能あうとて

とてあゝいほさう金とけう利休おきき

あ早知とてこれと移さき

とておれ機尖ちうきう人能通達き

の人たういほりおとんや

予若輩の時浪集の先輩の敷あゝのあう止

ちうておふう茶話きうは茶の沸きく沸く

たれいゝく炭取持お下火かこのけ大輪炭を入

し時主云未は焼くやうやと四う大う聲あや

行を流しぬく強うやあ熱たうなうかや

半炭のさやうしてはきせうたう輪炭をう

破下火を捨てせきをいほうあ熱の時か

あゝ能くう

利休或人のあういほ時主炭をいほ調う

孫まきへく又所をぬらふとせせゆ中を車一輛を
 買へ一處に速く運て退く一時宗旦いふ事なりしを
 詰りてうらうの事なりとてゆりて伯父云織歌の書
 時の宗旦かきりてゆ中の車一輛の木の法脱向ちりと
 なりてゆりていふ事宗旦も有りゆ中ありてとて
 宗旦とてゆりてとてゆり

道安織歌といふより何年何年の事ゆちりて形有
 一史のゆりてぬらふとせせゆ中を車一輛を
 買へ一處に速く運て退く一時宗旦いふ事なりしを
 詰りてうらうの事なりとてゆりて伯父云織歌の書

ゆ中い初巻よりゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
 結りてゆりてゆりて結りてゆりてゆりて

結りてゆりてゆりて結りてゆりてゆりて

結りてゆりてゆりて結りてゆりてゆりて

結りてゆりてゆりて結りてゆりてゆりて

結りてゆりてゆりて結りてゆりてゆりて

結りてゆりてゆりて結りてゆりてゆりて

陳水宗遠翁著述書目錄

陳源居藏



茶理譚

五冊

茶旨略

一冊

茶葉指掌

月之類
茶之類

九冊

茶旨大概

三冊

茶葉諸說

一冊

茶則

一冊

草庵茶事例

五冊

茶旨祖述

三冊

茶露堂

二冊

數寄者系繼

五冊

風流指辨

一冊

茶之湯口訣

一冊

櫻庭時要

一冊

卑言歌集

三冊

吉岡替答集

二冊

室翫記

五冊

瓦師證	一冊	懸歌造筆	一冊
諸架歌集	二冊	規格編	一冊
陶工文	二冊	肄業集	二冊

文政八年乙酉正月

書林

江戸 前川六左衛門
 浪華 河内至成斎
 皇教 吉田至治斎

